「深い川は静かに流れる」
日本とリトアニアの現代テキスタイル展覧会報告

“Deep Rivers Flow Silently”
Exhibition of Contemporary Japanese and Lithuanian Textile

田辺　由子
Yoshiko TANABE

「深い川は静かに流れる」
日本とリトアニアの現代テキスタイル展覧会報告

"Deep Rivers Flow Silently"
Exhibition of Contemporary Japanese and Lithuanian Textile

田辺　由子
Yoshiko TANABE
准教授（空間デザイン領域：テキスタイルアート）

An exchange exhibition by 10 textile artists from Japan and Lithuania was held in Kaunas City, Lithuania, in August 2019. As one of the five Japanese artists selected, I participated in installing the exhibition and in the opening reception. Participation in an overseas exhibition provided me with the opportunity to remind myself of how my cultural background is reflected in my own creations. Visiting a small country like Lithuania, which has preserved its own culture while bordering on large countries, acted as a trigger that allowed me to let go of the all-too-simple practice of comparing Japan to Europe.

2019 年 8 月、日本とリトアニアのテキスタイルアート作家 10 名による交流展が、リトアニアのカウナス市で開催された。日本から選ばれた 5 人の作家の一人として、現地での展示設営、オープニングイベントに参加した。

海外の展覧会に参加することは、自身の文化的背景がどのように制作に反映されているのかを改めて意識する機会にもなる。大国に隣接しながらも独自に文化を保ってきたリトアニアという小国に身を置くことは、欧州と日本の対比という単純な思考から自ら解放されるきっかけとなった。

1. リトアニアについて

リトアニアはバルト海に面するバルト三国の一つ、ポーランドの北東に位置する小さな国である。歴史的にはかつての旧ソビエト連邦の構成国として社会主義時代を経て 1991 年に独立を果たし、現在は EU の加盟国である。日本人には、第二次世界大戦の初期、ナチスの迫害から逃れるために集まった多くのユダヤ人にビザを発行した外交官の杉原千畝によって知られている。

今世紀に入りカウナスビエンナーレをはじめとする展覧会が数回行われ、また、今回も参加しているリトアニアの作家たちが京都で展覧会を開いたこともあり、テキスタイルアートの関係者の間では認知度が高い。

現在、テキスタイルアートが盛んなのは、ヨーロッパでは北欧や東欧であり、東欧では旧社会主義体制の時代を通して定期的にタペ

ストリーをはじめとするテキスタイルアートの国際展が行われてきた歴史がある。テキスタイルアートが注目される理由の一つとして、北欧、東欧圏内に織物や編物、籠など繊維素材を使った手工芸の技術がいまだ残されていることがある。

場所柄、長い冬を室内で過ごすことが多く、作業に長時間を要する織物や編物など手工芸が盛んであり、寒い土地柄ゆえの需要もあるのだろう。実際、北欧フィンランドでは、男女の区別なく国民のほぼ全員、編物ができるということである。ふりかえって日本においては、義務教育に編物が含まれていた時代は過去となり、世代を超えた伝授もないまま、美術大学の学生であっても編物未経験者が圧倒的多数となっている。

リトアニアでは亜麻栽培が盛んで、自ずとリネンを素材とした織物が発展してきた。特筆されるのは、素朴な民族衣装や寝具などの生活用品でありながらも、高度な組織織（そしきおり）へと技術的にもデザイン的にも進化したことであり、現在でもリネン製品はリトアニアの特産品として最もポピュラーである。日本においても、このようなリトアニアの雑貨が紹介され、少しずつだが認知されてきている。自身においては、2005年、愛知県で行われた愛・地球博に出展していたリトアニア館の斬新な空間展示の印象が強く、リトアニアという国を意識するきっかけとなった。

2. 日本とリトアニアの類似性

「深い川は静かに流れる」という展覧会タイトルは、元々はStill waters run deep.という英語のことわざを和訳したものをリトアニアのキュレーターのラサ・ジュキエネ氏が、日本のことわざと解釈してタイトルに用いたため、展覧会タイトルの英訳“Deep Rivers Flow Silently”は英語のことわざとは異なるものになっている。ある意味ネット社会の現代を象徴する展開で興味深いできごとであるが、タイトルを決めるに当たって、リトアニアと日本のテキスタイル作家の共通点を的確に指摘されているので、以下に展覧会カタログから引用する。

> もう一つ重要なのは、リトアニアと日本の間には芸術的思考の類似性があり、資料や素材の扱い方も似ているという点です。両国のアーティスト達は、自文化の古い織物の伝統を重んじ、それを作品の中に新しい形で活かそうとします。昔から続く自己の文化の文化的・倫理的価値と関わりを持つことは、その文化がこれまで歩んできた歴史への敬意を示すと共に、国家の伝統的な倫理観にも触れながら、新たな技術の中で布を形作り、染め上げ、伝統的な模様や装飾を取り入れることで、作家個人が惹かれるものを表現しています。

日本における織物は、西洋のタペストリー作りとは異なり、着物を作ることから発展してきたと言われています。リトアニア人も同様に、日々の暮らしの大部分は、スカートやエプロン、シャツなどの衣類を織ることに費やされてきました。この展覧会の作品の中にはかつて、もしくは今もなお、衣服であった時の形を残しているものもあるでしょう。一枚の布というものは、何かを覆い隠し、強調し、その中にある象徴、あるいはそれによって生み出された音の中で「語り」、そして、人の痛みをぬぐいさるのです

（ラサ・ジュキエネ　日本とリトアニアの現代テキスタイル カタログ 15p より抜粋）

日本とリトアニアに共通する伝統的な工芸技術の洗練度の高さは、そこに住む人々の地に足ついた生き方に基づいているのではないかと考察する。

リトアニアはヨーロッパにおいては遅れた辺境の地にあるのかもしれないが、バルト三国の共通項として、ごく小さなエリアに各国が独自の言葉をもち、歴史の過程で大国にのみこまれそうになりながらも、自らの生活に基づいた文化というアイデンティティをしっかり保ってきたことがある。

日本はアジアの東の端という文化や情報が常に流れ込む終着点にありながら、それらをのみ込み、豊かな自然を背景に自らの文化に変換してきた長い歴史がある。土地と深く関わり、その地で生産される素材、工夫された技術によって生み出された生活の道具や衣類など、今においてもその技術を細々（ほそぼそ）と引き継いでいるのが工芸作家たちである。そしてテキスタイルアートの作家たちの意識の中にも、世界において日本の独自性を発信する上で伝統文化の厚みを背景とする姿勢が、ごく自然な立ち位置として存在している。

3. 日本の作家たち

今回参加した日本の作家たちのうち 4 人は、30 年以上テキスタイルアートの世界で活動してきた者たちであるが、制作スタイルとして素材と技術そのものに重きをおいており、アートの文脈における自己表現からは一歩身を引いたような距離感をもっている。

唯一、若手作家である岸田めぐみの作品は、上記 4 作品とは一線を画している。実際、2、30 歳代の作家に綴れ織をはじめとする絵画表現に近いタペストリーの作家が多いのだが、元来、タペストリーの伝統は欧州のものであり、壁面を飾るものとして発展してきた表現方法である。若い作家は素材や技法に独自性を求めるのではなく、描く題材や造形表現そのものを重要視する傾向にある。

以下に、それぞれの出品作品を素材や技法の観点から解説する。

ひろいのぶこ「痕跡の布」

繭から糸を作る過程でできる不均質な糸や、織の過程でできる結び目など、織物の生産現場では均一化を目的に隠される部分をあえて可視化することで、織られた布を行為の記憶装置として位置付けている。

野田涼美「彼方への旅」

経糸と緯糸の交差によってできる織物の穴と編物でできる一本の糸で作る輪の連続体、かつての紋織で使われたパンチカードの穴に注目し、オパール加工や箔プリントなど、現代の染色技術と編物という手仕事を両立させている。

本間晴子「Mathuri-PAZRUKA58,59」

伝統的な祭りをモチーフにパズルのように色彩を組みあわせた日本独自の技法である型染めの作品。暖簾や着尺に使用される細幅の麻布を用いている。

田辺由子「風ふくむ時の隙間」

日本独自に発展した紙布の元となる紙縒（こより）という技法に着目し、糸の単純な秩序から解放されるべく枝分かれ状の紙縒を多数作り組み合わせた。素材は紙糸の生産現場で破棄される紙の端を利用している。

岸田めぐみ「ほほえむ　メガネ　2018」

メガネのフレームに経糸を張り、そこに綴れ織で人物の目とその周辺の表情をユニークに表現している。

4. リトアニアの作家たち

リトアニアの作家たちの内訳は、日本でも展示経験のある作家が3人、残り2人は若手作家であるが、両者では表現へのアプローチの仕方がかなり異なり、若手作家たちはファインアートの手法に則っている印象を受けた。

以下に各作品の技法、表現様式について解説する。

LAIMA ORŽEKAUSKIENÉ-ORE

ライマ・オルゼンカウスキエネ－オレ「聖母マリア What Are They?」

欧州各地から集めた壁画などの聖母マリア像の数々を包帯の布にデジタルプリントし、さらに手刺繍を加えている。

MONIKA ŽALTAUSKAITĖ GRAŠIENĖ
モニカ・ジャルタウスカイテ－グラシエネ「つながり」
　リトアニアの民間伝承におけるシンボルの一つである唐檜をモチーフにし、さらに「唐檜織」という伝統的な織り方をコンピュータジャガードで再現している。

LINA JONIKĖ
リナ・ヨルケ「My beloved ones. 2009–2019」
　人生の中における一瞬の情景を集めたイメージをデジタルプリントし、ビーズ刺繍を施したもの。

GRETA KARDI-KARDIŠIŪTĖ
グレタ・カルディ「Out of Milky Way」
　美術館の屋外に立つリトアニアの著名な彫刻家の銅像作品の足元に、収穫後の畑からインスピレーションを受けた無数の小さな木の棒を立てたインスタレーション。

GIEDRĖ ANTANAVIČIENĖ
ギエドレ・アンタナヴィチエネ「テキスタイルの音のカタログ」
　テキスタイルの音に注目した作品。説明を読みながら集めた音をヘッドホーンで聞く仕掛けになっている。

5. 両国作家の比較

　アートは極めて個人的な営みであり、その制作志向は単純に国という枠組みによって分類できるものではないが、今回は日本とリトアニアという2国の交流展であり、あえて比較することを試みたい。
　日本のテキスタイルアート作家たちは手仕事の部分を重視し、手作業と作家自身の個性が一体化したかのような作品を展開している。一方、今回参加したリトアニアの作家たちは表現のためにテクニックを選び、手仕事そのものを重視するのではなく、イメージする完成作品に向けてむしろ合理的なアプローチをしているようにみえる。
　特に昨今、産業界で取り入れられてきたデジタルプリントやコンピュータジャガード機による布の生産方法が、表現の分野でも利用されるようになった。もちろん日本においてもそれらの技術を作品に用いる作家がいるが、制作を業者に委ねることに起因しているのか、本来あるはずの作家のオリジナリティが希薄に感じられるものもある。それは業者委託によって素材がある程度限定されることや、原画の素材への変換方法が一定にならざるをえないこともあるだろう。
　リトアニアの作家たちが持っている表現のためのイメージの強度

はファインアートにより近い。技術は前面に押し出されるものではなく、あくまで表現を助けるためのツールだ。そういう意味では、手仕事の有り様そのものが表現の主体であるかのような日本のテキスタイルアート作家の方向性は、工芸作家に近いユニークな存在なのかもしれない。

6. 静かな空間

会場となったジリンスカス美術館では、屋外空間にインスタレーション作品、1階ギャラリー入り口付近の空間（110 m²）に2作品、一辺10 m余りの壁面のホワイトキューブの空間（143 m²）に2作品、32 mに渡るカーブした壁面のある空間（369 m²）に7作品が展示された。12点という作品数は実際の作家の数よりも多く、2名のリトアニアの作家が追加で作品を展示していたことによる。

作品規模に対して展示空間はかなり広く、リトアニアの作家の作品は屋外インスタレーションを除いて全て壁面展示であったため、日本の3作家の空間展示に助けられていた印象はあった。照明も全体に暗くした中で作品にスポットを当てることで空間の広さを感じさせないような工夫がなされた。

照明においては、個人的には自作品の見せ方として、背景となる壁面全体を明るくし、空間に浮かぶ作品そのものをシルエットとして見せたかったが、一部の壁面を明るくすると展示空間全体の調和を乱すことになり諦めざるをえなかった。

このような空間の広さや照明の仕方に加えて、作品そのものの静かな佇まいは両国の作家に共通するものだ。色彩がモノトーンの作品が多いのはリトアニアの作家の特徴のように感じられたが、日本の作家による素材をメインに置いた作品にも当てはまる。遠目から見た派手さはないが、緻密に作り込まれた作品の細部に深く見入ることができた。

7. 雪解けの瞬間

展示作業を終えた後、日を置いてオープニングレセプションを迎えたが、驚いたのは会場に詰めかけた人々の数である。街中を歩いていても人が少ないこの国で、広い展示会場が堰を切ったかのように人で埋め尽くされたのである。静かな展示空間が一瞬のうちに華やかな社交場に転換し、作品をバックに写真を撮る人々、作家とわかると質問してくる人など、長い冬から解放されて一気に春夏へと向かう、この地の人々のある種の熱気のようなものを感じさせた。

翌日から展示会場はまた静かな空間に戻る。自作を見て雪の結晶のようだと話しかけてきた来場者がいたが、この作品に特定のイメージはなく、育った環境や文化的背景が変われば作品を通して見

えてくるものも当然変わる。作品発表において興味深いのはそのような感覚の違いを知ることであり、あらゆる機会を通して作品は見られることによって、作者の予想し得ない更なる変化を遂げるものなのだ。

図 1　カウナス旧市街の街並み

図 2　街中のパブリックアート

図 3　ジリンスカス美術館外観

図 4　展示作業

図 5　展覧会風景

図 6　展覧会風景

図 7　展覧会風景

図 8　展覧会風景

図 9　展覧会風景

図 10　展覧会風景

図 11　展覧会風景

図 12　展覧会風景

図 13　オープニングレセプション

図 14　オープニングレセプション

図 15　オープニングレセプション

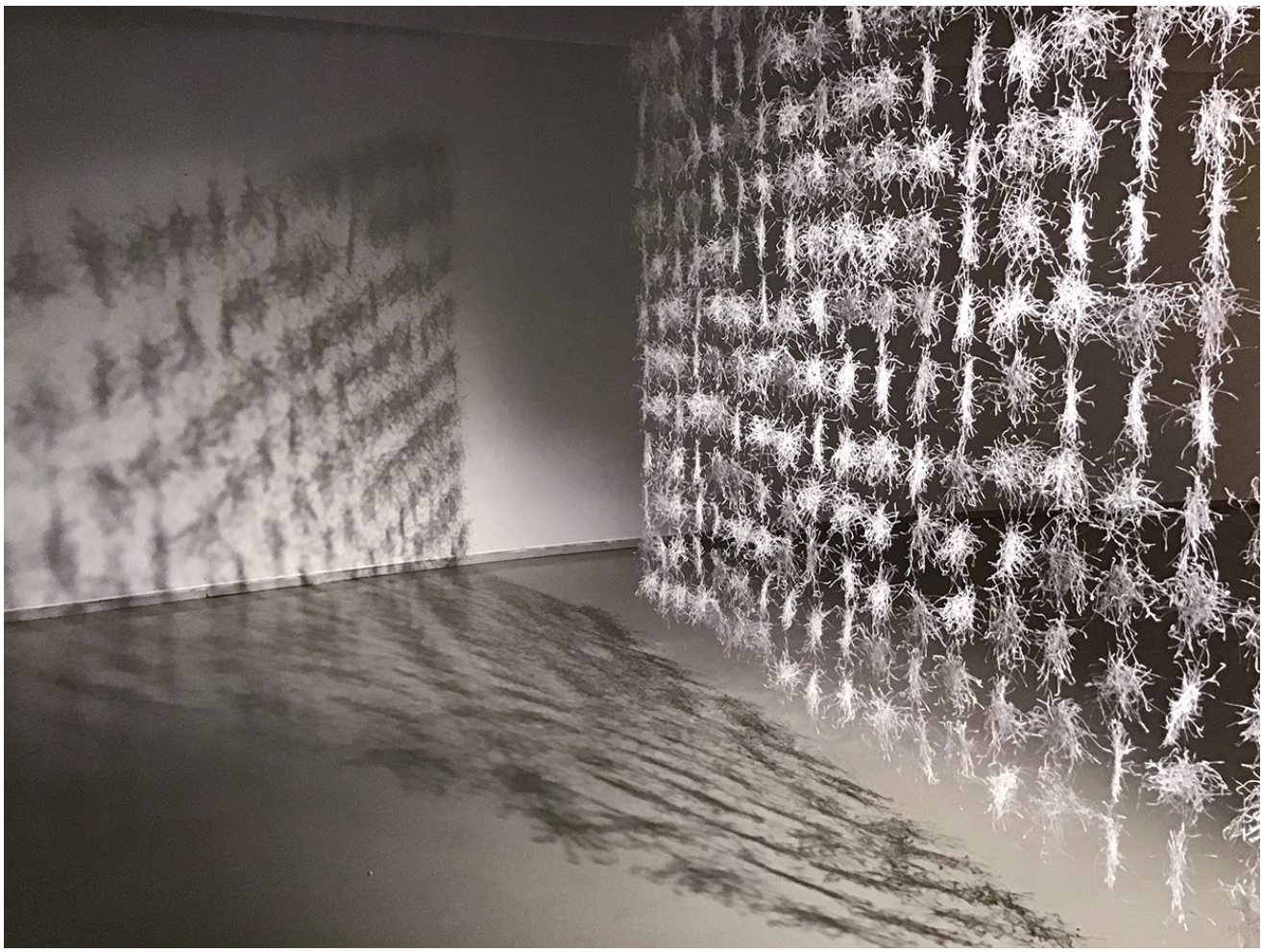

図 16　作品「風ふくむ時の隙間」

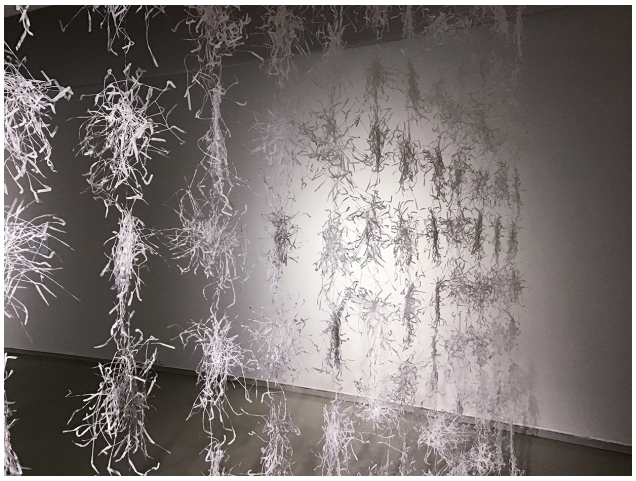

図 17　作品「風ふくむ時の隙間」